BRAVE　LOVE

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＲＡＶＥ　ＬＯＶＥ

【Ｎコード】
Ｎ７２１１Ｕ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
彼女の声を聞いた僕は大学を出て船に乗り。そして果てしない旅に入るのだった。アルフィーの名曲からヒントを得ました。

第一章

BRAVE LOVE

聞こえた。確かに。
僕には聞こえた。彼女のその声が。
聞けばいてもたってもいられなかった。大学の講義からいきなり席を立った。
その僕に教授が。驚いて声をかけた。
「何処に行くんだい？」
「彼女のところに」
「彼女のところ？」
「はい、彼女のところに行って来ます」
こう教授に言って。そのまま講堂どころか大学も出て。
その足で港に向かった。それから船を探した。
正直そこに行く船があるかどうかなんてわからなかった。けれど確信していた。
ある、この港にそこに行く船がある、このことを直感的に確信して。
僕はその船を探した。すると本当にあった。しかももう少ししたら出航するところだった。彼女がいるその星に、今まさにだった。
それを見て。僕はすぐにだった。
チケットを買ってそれから。港に入って船に飛び乗った。その僕に船員の人が言ってきた。昔の、二十世紀の駅員さんみたいな服の人だった。
「何処まで行かれるんですか？」
「彼女のいる場所に」
船員の人にもこう答えた僕だった。
「そこに行きます」

「彼女のところにといいますと」
「この船の終点です」
そこだった。彼女がいる場所は。
そこに行きたいと言って。チケットを出した。船員の人はそのチケットを見て。
船員さんは納得してくれた顔になって。それでチケットを受け取ってくれてそれから僕に言ってくれた。
「わかりました」
「いいですね」
「チケットがありますから」
だからいいと言ってくれた。
「では今から出航ですのね」
「有り難うございます」
「いえ、いいです」
僕が急に飛び乗ったことはいいと言ってくれた。優しい人だと思った。
そしてその優しい船員さんは僕にこうも言ってくれた。
「そこに何かがあるのですね」
「はい、あります」
その確信に基いて。僕は答えた。
「だから行きます」
「そうですか。けれど遠いですよ」
「わかっています」
それはもうわかっていた。けれどそれでもだった。
僕はそこに行くと決めた。一度決めたからにはもう降りたくはなかった。
それでだった。僕は出航を待つことにした。後はもうそこに向かうだけだった。
だから船員さんに。こう告げた。
「船旅も楽しませてもらいます」

「わかりました。では一緒にそこまで」
船員さんも言ってくれた。こうしてだった。
僕はその星に向かって出発した。汽笛が鳴って。
出航の放送がかかってから。船はゆっくりと動きだした。
そのまま港を出て銀河に出る。銀河には無数の星が瞬いている。
それを見て僕の胸は自然に高まった。これまで何度か宇宙に出て星の瞬きを見てきたけれど今度のはこれまで以上に。比べ物にならないまでに奇麗に感じられた。
その星達を見て。僕は傍に来ていた船員さん、さっきの船員さんに言った。
「何かこの星って」
「いつもと違いますか？」
「全然違います」
こう言った。そして今は。
無数の流星が僕の目に入った。赤い星や青い星が。無数に降り注いでいた。
その流星達も見て。僕は言った。
「この世にあるとは思えませんね」
「そうですね。そしてこの星達を見て」
「僕はあの星に向かうんですね」
「星は」
船員さんが今言う言葉は。
「希望への灯台なんですよ」
「希望へのですか」
「人類は宇宙に出て」
地球から出て。どうかというのだ。

第二章

「何もわからない大海原に出ましたけれど」
「その人類を照らしてくれたのがですね」
「はい、星です」
今僕達が見ているだ。星達だというのだ。
「この星達に照らされて道標にしてです」
「僕達は銀河を進んでいった」
「そして今に至りますから」
「だからですか」
そう言われてだった。僕も船員さんの話の意味を理解した。
「星達は希望への灯台なんですね」
「はい、そうです」
「そして」
その希望の灯台を見ながら。僕はまた船員さんに尋ねた。
「灯台に導かれて辿り着く場所は」
「約束の場所です」
そこだと。船員さんは答えた。
「人類はそこに辿り着くのです」
「僕もそうなんですね」
「勿論です」
それは当然だと。船員さんは答えてくれた。
「だからこそ。私達は銀河に出ているのですから」
「そうですね。だからこそ」
「では」
「はい」
僕は微笑みで。船員さんの言葉に頷いた。
それからだった。船員さんに対して言った。
「このまま。僕が行くその場所まで」

「行きましょう」
旅ははじまったばかりだった。けれど星達はずっと僕と一緒にいてくれて僕を照らしてくれた。船は全方位が見えるようになっていて。僕はまさにその星の海の中にいた。その中にいて僕の目指す場所に向かっていた。
途中ワープもあった。全く星が見えない時もあった。希望が。
けれどそれでも僕は信じていた。星達はまた僕の前に出て来てくれることを。
その僕に。船員さんがまた声をかけてくれた。
「寂しくないですか？」
「星達が見えなくてですか」
「はい、それは大丈夫ですか？」
「まて。出て来てくれますから」
だからいいと。僕は答えた。
「ですから」
「そうですか。だからですか」
「はい、だからです」
僕の答える顔は笑顔だった。そのことは自分でもわかっていた。
本当に辛くなかった。例え暗闇の中にいても。それが絶対に終わるとわかっていたから。
そしてだった。本当にだった。
何日もかかったけれどそれでも。暗闇は終わった。
また銀河の大海の中に出て。僕は船員さんに言った。
「希望はいつもあるんですね」
「星はですね」
「はい、暗闇は絶対に終わって」
絶望しても。それはだった。
「それで希望は」
「そうです。希望はいつもありますから」
「信じていますから」

そのだ。希望をだ。
「ですから安心していました」
「そうだったんですね」
「ええ。心細くはありましたけれども」
それでもだった。僕は絶望していなかった。不安ではあっても。
その僕に。船員さんがこう言ってくれた。
「もうすぐですから」
「終点ですね」
「はい、お客様が目指されているその場所は」
「結構長くかかりましたね」
「銀河の端ですから」
だからだというのだった。
「やはりそれは」
「そうですね。日本から」
日本から本当に銀河の端までだ。僕は日本の越後星系に住んでいる。そこから連合の辺境と言ってもいいその場所に向かったのだ。確かに無茶と言えば無茶だ。
けれどその無茶をあえてして。僕はそこに向かっているのだ。それが遂にだった。
「あそこまで、ですから」
「では。そこに着かれたら」
「彼女に会います」
そのだ。僕を呼んでくれている彼女に。

第三章

「そうします」
「あの星に恋人がおられるのですね」
「ええ、まあ」
声を聞いてそれだけだった。しかも頭の中で。
けれどそれでここまで来た。思えばおかしな話だ。
それでもそのおかしなことをして。僕はその星に向かっている。
それが遂にだった。
そのことも心の中で噛み締めながら。僕は船員さんに答えた。
「ですから」
「いいですよね。恋人は」
「恋ですね」
「愛とも言っていいでしょうか」
船員さんはこんなことも言ってくれた。前から、旅の最初の頃から思っていたことだけれどこの船員さんは結構なロマンチストだ。
「それがありますから」
「愛ですね」
「日本からですよ。それは」
「それは？」
「勇気もないとできませんね」
「勇気ですか」
無謀と言っていいかも知れないなんてことも思った。船員さんの話を聞いて。
「僕は勇気がありますか？」
「ありますよ」
船員さんは微笑んで僕に答えてくれた。
「それもかなり」
「だといいんですけれど」

「だからお一人で旅をされているではありませんか」
「あの星までですね」
「遠くに」
そうしていること自体にだ。勇気が出ているというのだ。
「しかしそれもです」
「遂にですね」
「はい、終わります」
本当にだ。終点はもうすぐだった。
「では。最後まで」
「旅を楽しませてもらいます」
「そうして下さい」
こうした話をしてだった。僕はその星に遂に辿り着いた。そして。
星に辿り着くとすぐに港を飛び出てそこに向かった。彼女がいる場所に。
ここでもそこにいるという確証はなかった。ただ確信していた。彼女はそこにいると。だからそこに向かった。港を出た町の外れの湖のほとりの家に。そこに。
そこは一軒だけぽつんと湖のところに佇んでいた。そうした家だった。青い湖の傍に水色の家がある。そこに向かってだった。
チャイムを鳴らした。すると。
そこから細い人が出て来た。顔はあくまで細く肌は透き通る様に白い。切れ長に垂れた目は青で睫毛が長い。腰まであるさらさらとした髪は白く輝いている。水色のふわりとしたワンピースを着ている。

第四章

その彼女にだ。僕は言った。
「来たよ」
「まさか」
「うん、日本から来たんだ」
笑顔で彼女に言った。
「君の声を聞いてね」
「まさか。本当にそうなるなんて」
「呼んでくれたよね、僕を」
「ええ」
驚きながらもだった。彼女はそのことを認めた。
「確かに」
「だからね。来たんだ」
僕はまた彼女に言った。
「ここにね」
「私も。実は」
「実は？」
「ずっと待っていたの」
微笑んでだ。僕に言ってくれた。
「貴方がここに来てくれるって」
「そうだったんだ。信じていたんだ」
「私はここに一人で住んでいて」
「学生さんかな」
「そうよ」
職業は同じだった。
「それで湖の管理人でもあるの」
「この湖の」
「釣り堀やボートがあって」

一人でもそれで生計を立てているみたいだ。実は僕はそこまでは考えていなかった。
「そうして暮らしているの」
「一人でだよね」
「そう、一人で」
それを確かめ合うやり取りになった。
「ずっと一人だったけれど」
「けれど僕が来たから」
「二人になったわね」
彼女は笑顔で僕に言ってくれた。
「貴方が来てくれたから」
「そうだね。それじゃあ今から」
「まずはお茶にしましょう」
「お茶だね」
「この運命に導かれた出会いをお祝いする為に」
その為にだと。僕を誘ってくれた。
「そうしましょう」
「そうしてくれるんだ」
「来てくれたから。私の声を聞いて」
「君の心の声を」
勿論メールやそうしたものは一切使っていない。彼女はここから日本にいる僕を呼んだ。超能力か何か知らないけれど彼女は確かに呼んだし僕も確かに応えた。
「それで来てくれて」
「一緒になってくれるから」
「だからなんだね」
「ええ。これからね」
これから。どうなるかというと。
「一緒になるから」
「それじゃあ」

「中に入って」
その水色の家の中にと。彼女から行ってくれた。
「そうしてこれからはね」
「二人でね」
「ずっとここで暮らしましょう」
こうした話をしてだ。僕は彼女の家の中に入った。あとはこっちの大学に編入したり住所を移したり荷物を送ってもらったりしたけれどそうしたものも終わって。
僕は彼女とずっと一緒になった。ここまで一人で来て。希望の灯台に照らされながら。

ＢＲＡＶＥ　ＬＯＶＥ　　完

２０１１・７・７

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7211u/

ＢＲＡＶＥ　ＬＯＶＥ

2011年7月17日03時11分発行